

# 明石の物語と柏木の物語

——明石の女御の子の問題を中心に——

高田 祐彦

『源氏物語』若菜下巻、朱雀院の五十賀を企画した光源氏は、女三の宮に琴を教えていた。明石の女御は、その琴の曲を聴きたかったため、十一月の神事の時期にことよせて六条院に里下

がりした。懐妊五ヶ月であった。しかし、正月に、女衆が催された後、紫の上が発病、そして、柏木・女三の宮の密通、六条御息所の死霊出現という事態が語られ、その騒ぎに覆い隠されるように、女御の出産は描かれなかった。帝の三の宮、後には匂宮として物語の主要人物となる、この皇子の出産が語られないということは、いかにも不思議なことと思われる。

もちろん、この段階で後の匂宮という存在の構想がなかったということは考えられる。後述するように、このあたりの女御

の子についての叙述には、不安定な面もあるからである<sup>①</sup>。しかし、それならば、なぜ女御の懐妊が語られる必要があったのか。女御の子に関わる叙述を綿密に追跡しながら、この問題を考え、さらに広い視野の中に位置づけてみたい。

## 二

若菜上巻の後半、明石の女御は東宮の第一皇子を生む。この出産は、光源氏と明石一族の将来を決定づける出来事として詳しく語られている。若菜下巻に入り、冷泉帝の退位、東宮の即位となり、第一皇子は新東宮となった。女御の子の問題を、代替わり後の状況から順を追って見ていくことにしよう。

(A) 東宮の女御は、御子たちあまた数そひたまひて、いとど御おぼえ並びなし。

〔源氏物語〕の引用は、新編日本古典文学全集本により、巻名、冊番号、頁などを必要に応じて記す。表記を改めたところがある。

明石の姫君は、東宮の母として「東宮の女御」と呼ばれるに至った。この新東宮が生まれてから五年、「御子たち」は「あまた」になつていたのである。

新東宮の将来の即位も確実視される中、源氏と明石の人々による住吉詣が行われる。盛大な住吉詣が描かれた後、物語は、今上帝即位に伴い、女三の宮の存在感が増大したことを、「(光源氏が)渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく」(④一七七)と語り、夜離れが増えた紫の上は、女御の子たちをかわいがる。

(B) 春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとりわきてかしづきたてまつりたまふ。その御扱ひになむ、つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。いづれも分かず、うつくしくかなしと思ひきこえたまへり。

(④一七七―一七八)

女一の宮は、ここが初出である。「さしつぎ」とは、東宮の次に生まれたという意味であるが、(A)の「あまた」と併せ考えると、女一の宮の下にも女御所生の子がいるという含みがあるろう。「いづれも分かず」とあるのは、名前の出ている限りでは、東宮と女一の宮であろうが、現在、東宮は内裏にいるの

で、女一の宮とその「下の子」を指すとも考えられる。「下の子」は複数かもしれない。したがって、東宮を含めて少なくとも三人の子の存在が示されたことになり、(A)の「あまた」と対応している。ただし、この時点では、その子(ら)は、男御子か女御子かはわからない。

この直後、花散里がそうした紫の上をうらやましく思い、夕霧の子を迎えた、という次のような叙述が続く。

夏の御方は、かくとりどりなる御孫あつかひをうらやみて、大将の君の典侍腹の君を切に迎へてぞかしづきたまふ。

(④一七八)

その後、翌年の朱雀院の五十賀に向けて六条院でも準備が始まるが、その中で女御の懐妊が次のように語られる。

(C) 御子二ところおはするを、またも気色ばみたまひて、五<sup>つぎ</sup>月ばかりにぞなりたまへれば、神事などにことつけておはしますなりけり。十一日過ぐしては、参りたまふべき御消息うちしきりあれど、かかるついでにかくおもしろき夜々の御遊びをうらやましく、なごて我に伝へたまはざりけむとつらく思ひきこえたまふ。

(④一八二)

本稿冒頭で言及したのは、この箇所である。

この「御子二ところ」については、次のように説が分かれる。

- ① 東宮と女一の宮
- ② 東宮と二の宮
- ③ 東宮と女一の宮を除く皇子二人

①は、新編全集の頭注に「女御はすでに、一皇子一皇女をもうけている」とあり、この説を採っていると思われる。たしかに、ここまで登場している女御の子で、はっきりとその名を記されているのは、東宮と女一の宮の二人であるが、これでは、(A)の「あまた数そひ」にはそぐわない。

②は、玉上琢弥『源氏物語評釈』や新岩波文庫の説である。新岩波文庫の注を引用する。

ここでは皇女(女一宮)を除く皇子のことで、東宮と、後で話題にされる「二宮」の二人か。

次の③もそうであるが、しばらく後の次の叙述も抛り所にして  
いる。

(D)「この御子たちの御中に、思ふやうに生ひ出でたまふもの  
したまはば、その世になむ、そもさまでながらへとまる  
やうあらば、いくばくならぬ手の限りもどめたてまつ  
るべき。二の宮、今より気色ありて見えたまふを」など  
のたまへば、明石の君は、いと面だたしく、涙ぐみて聞  
きゐたまへり。(④二〇〇)

これは、年明けに催された女楽の場面における光源氏の会話の  
一部である。ここを併せ考えることによつて、先の「あまた」  
という条件も満たすこととなり、合理的な解釈だと思われる。  
②は、(C)の「御子」を「男御子」と限定して理解した説で  
あり、(B)が含み持つ女一の宮の下の子は男御子だったのだ、  
という展開として読める。ただし、男御子に限定した解釈にな

るのは、今回懐妊した子が三の宮として産まれることをあらか  
じめ見越した解釈だといえないこともない。

③は、新潮日本古典集成や新日本古典文字大系がとる。いず  
れも、(A)の「御子たちあまた」の箇所を参照指示する。東  
宮を含めて、御子が四人という理解になり、「あまた」の語感  
としては十分であろう。根拠としては、他に(D)の「二の宮」  
を明融本や河内本の多くが「三宮」に作るということもあるよ  
うだ。集成は、(D)の「二の宮」を明融本に抛りつて「三の宮」  
の本文で立て、頭注に次のように記している。

明融本、河内本に「三の宮」。後の匂宮である。これが原  
形であろう。青表紙本に「二の宮」とするものが多いが、  
抛りがたい。

ただ、そうすると、二の宮と三の宮がすでに生まれていて、  
ここで新たに懐妊する子は、四の宮となる。若菜下巻の終わり  
の方、朱雀院の五十賀が近づくとあたりに「このたびの御子は、  
また男にてなむおはしましたしける」(④二七三)とわざわざ言及  
された後、消えてしまうことになる点、不審が残る。人物のい  
わゆる立ち消えは時に見られるが、これが「四の宮」だとする  
と、横笛巻で「三の宮三つばかりにて」(④三六二)として現  
れる宮(つまり匂宮)に相当することとなる。すなわち、横笛  
巻で、「四の宮」から「三の宮」に設定し直した、ということ  
になるのであるが、それならば、②説の方がすっきりする。(D)  
の「三の宮」という明融本の本文を根拠にすることには、慎重

であった方がよさそうである。

この三つの説の中では、②にもっとも説得力があるだろう。ただし、他にもう一つの解釈の可能性が考えられる。

それは、東宮を除いて女一の宮と二の宮、とする見方である。

②説は、女一の宮を除いた男御子の数として「二ところ」というので合理性があるが、この解釈も、東宮という特別な地位に至った御子を除く、という点で、十分に成立可能であろう。若菜上卷冒頭、朱雀院の御子を紹介するくだりに、「御子たちは、東宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四所おはしましける」(④一七)とあったことも思い合わされる。また、(B)の「いづれも分かず」とのつながりもよい。ただ、②との優劣を決める決め手には欠けている。今は、どちらも可能性がある、というところにとどめておきたい。

なお、(C)の「十一日」は、やや唐突な表現ながら、十二月十一日の月次祭を指すのであろう。十一月以来の神事は一区切り、として、帝は女御の帰参を催促する。

### 三

(D)から先をたどってみよう。(D)では、「二の宮」以外に、「この御子たち」の箇所にも解釈の問題がある。先に注(2)でふれたように、新編日本古典文学全集は「この皇子たち」という表記である。底本である明融本では、「このみこたち」と仮名書きであるので、「皇子」という表記は、校注者の判断に

よるのだろう。新編全集は、(C)の「二ところ」を「一皇子一皇女」ととっているようなので、ここを「皇子たち」とすると整合しないのだが、頭注に「明石の女御腹の皇子たち」とあり、東宮と二の宮という理解であろうか。玉上評釈も、「明石の女御の生んだ皇子たち。「みこ」は親王である」とする。

しかし、「この」という指示語や「思ふやうに生ひ出でたまふ」という表現からは、いま六条院で育っているという意味合いが感じられ、東宮は含まれていないとも考えられる。

この場面、光源氏の音楽論がまとまって披露される箇所の一部であるが、源氏と夕霧の対話として展開されていた。そこで源氏は、自らの卓絶した音楽の技量がいま断絶しつつあることを嘆き、夕霧は、それを受け継いでいないことを恥じる。それを受け継ぐ可能性があるのは、明石の女御腹の御子たちなのである。それゆえ、ここで明石の君の反応が取り上げられるのであった。「御子たち」は、いま女御が懐妊しているのが三の宮だとすれば、女一の宮と二の宮であろう。女樂では、女三の宮の琴は、源氏の特訓によってみことな上達を遂げたが、源氏が自分の技量を本当に伝えたいのは、やはり自分の血を引いた明石の女御腹の御子たちであるにちがいない。

華やかな女樂は終わった。翌日、紫の上は源氏との長い会話を交わしたが、これまでも度々申し出ていた出家の願いを、またしても却下された。年齢も、厄年の三十七歳と記され、その晩、紫の上は発病する。回復せぬまま、朱雀院の五十賀の子

定であった二月も過ぎ、二条院に移ることとなった。そうして、見舞いにやって来た明石の女御との対面の場面になる。

(E) 女御の君も渡りたまひて、もろともに見たてまつりあつかひたまふ。「ただにもおはしまさで、もののけなどいと恐ろしきを、早く参りたまひね」と、苦しき御心地にも聞こえたまふ。若宮のいとうつくしうておはしますを見たてまつりたまひても、いみじく泣きたまひて、「大人びたまはむを、え見たてまつらずなりなむこと。忘れたまひなむかし」とのたまへば、女御、せきあへず悲しと思したり。

(若菜下④二二五～二二六)

紫の上は、懐妊中の女御を氣遣つて、もののけが移るといけないから早く帰るよう促す。女御は、女衆の折に、いとふくらかなるほどになりたまひて、なやましくおぼえ

たまひければ、御琴も押しやりて、脇息に押しかかりたまへり。

(④一九二)

というほどであったから、さらにお腹が大きくなっているはずである。

この「若宮」については、古注釈以来、女一の宮とする説と二の宮(あるいは三の宮)とする説とに分かれる。

実は、この箇所も、後続の箇所を考え合わせる必要がある。それは、若菜下巻のしばらく先で、源氏が女子教育の難しさを紫の上に語る一段である。源氏は、柏木と女三の宮の密通の事実を掴み、朧月夜と朝顔の姫君の出家も知った。

(F) 女子を生ほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。生ひ立たむほどの心づかひは、なほ力入るべかめり。よくこそあまた方々に、心を乱るまじき契りなりけれ。年深く入らざりしほどは、さうざうしのわざや、さまざまに見ましかばとなむ、嘆かしき折々ありし。若宮を心して生ほし立てたてまつりたまへ。

(④二六三～二六四)

「若宮」という語は、『源氏物語』では皇子を指すことが多いが、この「若宮」は、前後の文脈から女一の宮をさすと見るほかない。したがって、(E)についても、その可能性はあるのだが、女一の宮か二の宮かは、前後の文脈から特定することができない。

だが、もし女一の宮であるならば、「女一の宮」とか「姫宮」と書けば特定できるところ、「若宮」としているのは、二の宮だということではないだろうか。あるいは、姉である女一の宮より、年下の二の宮の方が「若宮」と呼ばれるのにふさわしいかもしれない。

ここで紫の上は、「大人になるのを見届けられないだろう、私のことを忘れてしまふだろう」と、祖母としての悲しい思いを伝えているが、これは、後の御法巻で、やはり紫の上が匂宮に向かつて「まろがはべらざらむに、思し出でなむや」(④五〇二)、「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この

対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に心とどめてもてあそびた  
まへ。さるべからむ折は、仏にも奉りたまへ」(④五〇三)な  
どと語りかける形で反復される。そうした反復も、ここを二の  
宮ととる小さな根拠となるだろうか。

以上、煩を厭わず、明石の女御の子に関する記述を追ってみ  
たが、全体に曖昧な要素が付きまとうことは否めない。一応、  
女樂の時点では、女御の子は、東宮、女一の宮、二の宮が生ま  
れていて、四人目の子を懐妊中と見ておく。

#### 四

このようにして、女樂と平行するように、女御の懐妊が語ら  
れてきたが、その出産は、柏木・女三の宮の密通、六条御息所  
の死霊出現という事件に覆われ、語られることはなかった。前  
年の十一月に五ヶ月とあったことから、実際の出産の時期はほ  
ぼこれらの事件と同じ頃と考えられる。なぜ、女御の出産は語  
られないのか。もちろん、物語は歴史の記述ではないから、語  
られる事柄は選択される。女御の出産は、すでに語られてきて  
いる今上帝の世の更なる安定、発展、そして、明石一族、光源  
氏一統の繁栄、という既定路線を押し進めるものである。その  
意味では、物語を展開させる力に乏しい。それに対して、柏木・  
女三の宮の密通や六条御息所の死霊出現は、六条院世界の決定  
的な変質を導くという意味において、より一層焦点を当てられ  
てしかるべき事柄であるから、それによって、女御の出産とい

う出来事が覆い隠されてしまうのも、ある意味では当然ともい  
える。それでは、なぜ、女御の懐妊という叙述は必要なのか。  
あるいは、女御の懐妊は物語世界に何をもたらしているのか。

紫の上の発病がなかったならば、めでたく朱雀院の五十賀が  
催され、引き続き女御の出産ということになっただろう。で  
は、紫の上の発病や柏木の事件が急な予定変更かといえ、も  
ちろんそんなことはあるまい。朱雀院五十賀が延期され続ける  
ものとしてあるのは既定路線であろうし、その中で、女御の懐  
妊は物語世界に何をもたらしているのかと問う必要がある。極  
端に言えば、女樂と並行して女御は懐妊していてもいなくても  
そう変わりはないとも言える。

端的に言えば、女御の懐妊が柏木の事件によって覆われる、  
そのことじたいに意味がある。この展開は、若菜上巻、女御の  
第一皇子出産と踵を接して柏木による女三の宮のかいま見が語  
られたことと連動している。

ここでは、三月十余日の女御の出産からあまり日を置かず、  
柏木のかいま見が語られた。誕生した皇子の産養とそのなごり  
のにぎわいが続いていたと見られるにもかかわらず、かいま見  
のあった蹴鞠の日には、光源氏は「このごろこそいとつれづれ  
に紛るることなかりけれ」(若菜上④一三六)と、来訪した螢  
宮や柏木に語っていた。その日は、けっして月末というわけ  
ではなく、月末に催される小弓までいささか日数が空くような日  
であった。しかも、「桐壺は若宮具したてまつりて参りたまひ

にしころ」(若菜上④一三七)とあるように、出産を終えた女御は若宮とともにすでに宮中に帰っている。客観的な日付から言えば、いささか無理な時間設定であることは否めないが、蹴鞠の日が語られる時には、実際の日付以上に明石の姫君の出産は過去に遠ざかっている、という書き方である。

その蹴鞠の日が語られる一段が「三月ばかりの空うららかなる日」(若菜上④一三六)と書き起こされるのは、ほとんど明石の女御の出産と無縁な、まるで別世界のような趣である。実際、東宮の皇子誕生と柏木の恋との間には直接の関係などはなく、別個の事柄が無理をして三月の中に詰め込まれている印象である。その二つの間に、皇子誕生の知らせを受けた明石の入道が、その機縁となった夢について長大な手紙を寄こし、それによって、物語の時間は過去に遡りつつ肥大化させられている。これについて、「出来事の時間」と「言説の時間」との関係の問題として明快な把握を示した秋山虔氏によれば、皇子誕生は六条院の繁栄の更なる到達を意味するものであるのに対して、柏木・女三の宮の関係は、「そのような到達をその内部から崩落へと導く物語の開始」であり、そうした異質な主題の推移には、入道の手紙等を語る長大濃密な「言説の時間」の媒介が必要であった、という。有益な指標といふべきであろう。

そのような、時間に関わる物語の方法に関する分析に抛りつつ、私は、ここで、明石の物語、柏木の物語双方から、この三月という季節が重要な意味を持つこと、そして、そこから時間

のせめぎ合いを生じさせつつ、緊張的な物語の展開が可能になった、という関係を読み取ってみたい。

すなわち、明石の一族にとつて、三月、とりわけ十日過ぎと云うのは、特別な時期であった。入道が暴風雨の中、光源氏を須磨に迎えにやって来たのは、三月十三日であった。また、明石の女御が生まれたのは、三月十六日。そして、この若菜上巻の第一皇子の誕生は、おそらく三月十二日。

明石側のこうした日付の偏りに対して、柏木のかいま見は、もちろん若紫巻の源氏による紫の上かいま見と対応関係にある。光源氏の物語をなぞるようにしながら、かいま見から密通へと至る柏木の物語では、わずかにかいま見ることができた女三の宮という「桜」は、春という季節とともに再び見えなくなる、という設定である。このあたりの物語には、「山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」(古今集・恋一・四七九・貫之)という歌が底流としてあり、かいま見後の月末に柏木が再訪した六条院は、「今日にとぢむる霞のけしき」(若菜下④一五四)として閉ざされ、それから五年もの月日の間、柏木は女三の宮への思いを募らせることになった。

冷泉帝から今上帝への譲位に至るまでの五年、明石の女御の御子は「あまた」となり、柏木は、中納言に昇進して女二の宮と結婚しながらも、女三の宮への思いを断念しきれない年月であった。

そうして、女楽の後、暦の上では、春の終わるか夏の初めと

推定される明石の女御の出産は、柏木の密通と六条御息所の死靈出現に覆い隠された。若菜上巻末で、明石の榮華と対置されるようにせり上がってきた柏木の物語は、ついに明石の更なる榮華の描出を覆い隠してしまうまでに至った。しかも、女御の出産が書かれなかったというだけでなく、女樂後に発病した紫の上が三月に二条院に移った後の六条院は次のようなありさまであった。

院の内の人々は、みなある限り二条院に集ひ参りて、この院には、火を消ちたるやうにて、ただ、女どちおはして、人ひとりの御けはひなりけりと見ゆ。(④二二五)

この直後に、先の(E)、女御が紫の上を見舞う場面が来る。紫の上を見舞った後、女御は火の消えたような六条院で出産をした、ということになる。女三の宮への思いを募らせる柏木が小侍従に胸の内を打ち明けるくだりは、こう書かれている。

かくて、院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。(④二二八)

もはやここには、明石の女御の出産という慶事が、叙述として入る余地は微塵もない。

このように、明石の女御の懐妊は、第一皇子の折は出産として語られ、その後、やや窮屈な形で柏木の物語が続いた。この度の懐妊では、柏木と女三の宮の密通に筆が費やされ、出産は書かれることがなかった。若菜上下巻において、明石の物語と

柏木の物語がある種の連動を以て語られる、という方法が強固に繰り返されている、と見てよいだろう。

そして、出産の語られなかった女御の懐妊を引き継ぐかのように、女三の宮の懐妊という事態に至る。柏木との密通による罪の子の懐妊も、世間から見れば、六条院の正室の懐妊という慶事である。紫上の病や朱雀院五十賀の延期が続く六条院にあって、わずかに明るい話題に見えるものが、恐るべき暗黒なのであった。普通に祝福されるはずの女御の出産に代わり、祝福され得ない女三の宮の懐妊の時間が続いてゆくのである。

## 五

出産が描かれることはなかったが、この女御の御子については、先にほんの少しふれたように、若菜下巻の終わりの方で次のように語られている。

(G) 十二月になりけり。十余日と定めて、舞ども馴らし、殿の内ゆすりてののしる。二条院の上は、まだ渡りたまはざりけるを、この試楽によりぞ、えしづめはてで渡りたまへる。女御の君も里におはします。この度の御子は、また男にてなむおはしましたしける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明け暮れもてあそびたてまつりたまふになむ、過ぐる齡のしるし、うれしく思されける。(④二七三)

紫の上の病によって延期となった朱雀院の五十賀は、十二月

の十日過ぎと決まった。そのための試楽を見に、紫の上が六条院にやつてきた。明石の女御も里下がりしている。「この度の御子は」とあるので、出産のための里下がりかと、ふと読んでしまうが、やはり、四月頃に生まれた御子のことであろう。さすがに間隔が足りない。しかし、この書き方は、「また男にて」「すぎすぎ」と、いかにも続けざまに男皇子が生まれたような感じを与える。事実、玉上評釈は「ご出産によつて」と説明し、集成も「女御の君も」の一文に「お産のためであること、次の文章でわかる」と注を施す。

文章じたいからは、そうとるのが自然に思えるが、女樂の折に懐妊していた子が、予定通り四月頃に生まれていたのであれば、ここで新たな御子の誕生は何としても無理である。三月に女御は紫の上を見舞っているから、出産を早めに想定することもできない。「この度の御子」は、四月頃生まれた御子を指すにしては、間が抜けているが、やはりその御子のことであり、たとえば、久しぶりに六条院に戻った紫の上との対面が初めてであろうことなどから、「この度の」とした、といったことが考えられようか。

しかし、なお翻つて考えるに、「事実」としてはそうであっても、ここは、いま見たような「書き方」をこそ重視しなければならぬところなのであろう。そうした客観的な出産の間隔ということを超えて、女御は次々と御子に恵まれるように描かれている、ということが大切なのだと思う。代替わり後、

女御が現れる度に子どもが増えてゆく、そういう書き方がされていると見てよいだろう。実際に女御の出産が書かれるのは、最初の東宮のみであり、それは逆から言えば、第一皇子のみ盛大に描き、その後の子の出産の様子は描かない、ということでもあるだろう。

そして、ここで女御が六条院に来ているのは、出産のためでなければ、試楽を見るためであろう。紫の上と女御がともに試楽を見にやつて来る、というのは、前年の暮れ、源氏から琴の音を教わったことのない紫の上と女御が、女三の宮と源氏の琴の音を聴きに来たという展開とよく似ている。女樂の後、予定されていた朱雀院の五十賀は延期され、今に至っている。女樂後の「中断」からようやく「再開」になったという趣であり、そこで女御の子の誕生にふれられる、という結構である。

長い若菜上下巻がいよいよ閉じられようとする今、朱雀院の五十賀は何としても挙行されねばならない。若菜上巻の光源氏の四十賀と首尾呼応する構図になるはずだからである。賀宴に参加できない女君たちの存在は、試楽を華やかにするとともに演奏者たちには緊張感をもたらし。

その試楽にすぐれた趣向を加えたのは、柏木であった。しかし、日が暮れ、盃が回る中、かの光源氏の痛烈な一言が柏木にとどめをさす。

過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。

さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。  
老は、えのがれぬわざなり。(4二八〇)

試案を語る一段は、女御の御子への言及に始まり、苦惱する柏木と源氏との対話を経て、源氏の一言が柏木の死命を決した。ここでは、女御の御子にふれる叙述であっても、もはや栄華の発展といった意味合いはあまり大きくない。にもかかわらず、御子を生んだ女御について語られる叙述は、柏木の破滅へとつながってゆく。若菜上下巻における明石の物語と柏木の物語とのつながりは、かくも強固にここに至るまで継続しているのであった。

## 注

(1) 早く、稲賀敬二氏が、このあたりの明石の女御の子に関わる記述の問題点を要領よく整理した上で、「当帝の三の宮」である匂宮は、若菜巻ではまだその像を結んでいない」(『解釈と鑑賞』一九七・一五)と言われていたとおりであろう。

(2) この箇所、新編全集の表記は「皇子」。行論の都合上、紛らわしくなるので、「御子」と改めておく。

(3) 明融本は、「三」の右傍に「二」と傍記する。新編全集は、この傍記を採用して本文に立てているのであろう。校訂付記に記載がないのは、他本との校訂によるものではない、ということである。ところが、他本の本文異同も考慮されているに違いない。この「三の宮」という本文については、石田穰二「三の宮のこと」(『源

氏物語攷その他』笠間書院、一九八九年)、茅場康雄「若菜下の巻の三の宮」(『学苑』六八三号、一九九七・二)などに、それを支持する立場からの考察がある。

(4) ここまで、光源氏、冷泉帝、今上帝第一皇子(東宮)、後に、匂宮や匂宮の皇子などに用いられている。

(5) 秋山虔「源氏物語『若菜上』巻の一問題―出来事の時と時と時間―」(『山岸先生記念論文集日本文学の視点と諸相』汲古書院、一九九一)。

(6) 鈴木宏子「柏木の物語と引歌」(『古今和歌集表現論』笠間書院、二〇〇〇年)。

(7) 集成は、「前に見えた「三の宮」に次ぐ方である」として、(D)の箇所を参照指示している。その「二の宮」を、集成は「三の宮」として本文を立てていること、前述のとおり。しかし、「三の宮」に次ぐ方」は、女樂の時に女御が懐妊中だったのであり、この十二月の里下がりの折に生まれたわけではない。

(たかだ・ひろひこ／本学教授)